

## 日常生活動作を支援する技術を自ら探求できる自己学習支援教材の開発

宇城 令<sup>\*,1)</sup>、浅田義和<sup>2)</sup>、高山詩穂<sup>3)</sup>、川上 勝<sup>2)</sup>、鈴木義彦<sup>2)</sup>、滝 恵津<sup>4)</sup>、寺山美華<sup>2)</sup>  
、井上和子<sup>2)</sup>、河野龍太郎<sup>2)</sup>

1) 前聖隷クリストファー大学、2) 自治医科大学、3) 聖徳大学、4) 前聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科博士前期課程

### 【目的】

本研究は、セルフケアに問題がない学生が、本来体験しえない麻痺状態の再現をとおして、日常生活動作を支援する技術を自ら探求できる自己学習支援教材を開発する。すでに開発した「装着型関節拘縮シミュレータ」(特願 2013-080011)を使用することで、上下肢の麻痺状態の設定は可能である。そこで次の段階として、インストラクショナル・デザイン (Instructional Design: ID) に基づいた教育方法を考案し、学生が対象の日常生活動作を支援する技術を自ら学び続けられる自己学習支援教材を開発する

### 【方法】

ADDIE モデルを骨子とした ID に基づき自己学習教材を開発する。この ADDIE モデルは、Analyze→Design→Develop→Implement→Evaluate と回していくが、この要素ごとにも常に Evaluate し改善していき、この全てが教材開発過程となる。以下のスケジュールによって開発した。

1. 平成 25 年度本学共同研究費による移動などの日常生活動作支援方法等を検討した「装着型関節拘縮体験シミュレータの実用可能性の検討」結果より、学習を促進する要素と得られた課題をもとにシミュレータの使用方法を再検討する。
2. 同時に学生が戸惑っていた点、支援方法が発想できなかったところを整理・分類し、学生の共通性と独自性を明らかにし、その共通性にどの程度、どのようにヒントを出すか検討する。独自性としてより先に進められる学生には、ADVANCED として発展学習へ導くよう内容を検討する。先に進めない学生には、あらゆる支援方法の可能性について再検討する。
3. 教材の構成は、ガニエの 9 教授事象の知見を基にし、学習意欲を高める仕掛けには、ケラーの ARCS 動機づけモデルを参考にする。

### 【結果】

平成 25 年度に学生が実施した日常生活動作(ベッド上臥位→座位→立位、座位→車いす移乗、寝衣交換)のうち、ベッド上座位から車いす移動が最も困難さが高く、すべての学生が「車いすの位置」「車いす移乗に向けた対象者の準備」「車いすへの移乗過程」「移乗後の調整」「資源の利用」について、わからないまたは難しいと感じ安全性とスムーズな移乗に対して課題があった。この課題を「事前に知っておくべき知識」「対象者ができることできないことの把握」「自分の能力の把握」へ分類し、漫画と写真を用いた学生と教員との対話形式の教材を作成した。また、「よくある間違い」として Q&A や「もっと進んでみよう」というコーナーをつくり学生の探究心をかきたてるつもりとした。

### 【考察】

本教材は学生が麻痺状態を体験することにより、患者の安全を守ることや支援方法について自ら探究することをねらいとした。今後はこの教材を使用し、学生の反応と対象者への支援方法の内容についてどのくらい達成できるかを評価していきたい。

### 【学会発表の予定】

2016 年 3 月医療教授システム学会にて発表予定である。